〈特集論文〉

エスノグラフィック・インタビュー
――健康とウェルビーイングを目指す対話的アプローチを通して――

道信良子*
*福井県立大学看護福祉学部

Ethnographic Interviews: By a Dialogic Approach of Health and Well-being

Ryoko Michinobu *
* Professor, Faculty of Nursing and Social Welfare Sciences, Fukui Prefectural University

キーワード

対話的	dialogics
ヘルスエスノグラフィー	health ethnography
エスノグラフィックインタビュー	ethnographic interview
健康	health
ウェルビーイング	well-being

Ⅰ．はじめに

人の保健，医療，福祉の向上をめざしたかかわりには，相手との「対話」を進めながら，分かりあい，知りあい，進められていくようなコミュニケーションがあります。それに対して，専門知識がある人から，その知識の恩恵を受けようとする人へと，治療やコンサルテーションの方針が，示されるようなコミュニケーションがあります。

どちらも保健・医療・福祉における具体的な治療やコンサルテーションの実践には欠かせませんが，対話的なコミュニケーションには，指示的なコミュニケーションよりも，多くの可能性があるように思います。なぜなら，人というものは対話することによって生きて，気づきを得て，自分を見つめなおすからです。その自己の変容が，さらに周囲の人とのコミュニケーションのあり方に影響を与えます。

本稿では，このような対話的アプローチに結びつく研究の方法と私が考える，エスノグラフィック・インタビューの基本を解説します。そして，第36回日本保健医療行動科学会で行ったエスノグラフィック・インタビューのワークショップの流れにそって，この方法を具体的に解説します。最後にこのワークショップに寄せられた意見を踏まえて，対話的なアプローチについて，私の考えを述べます。なお，前半のエスノグラフィック・インタビューに関する記述は，私が書いた『ヘルス・エスノグラフィ』から一部抜粋しています。

Ⅱ．エスノグラフィック・インタビューとは

インタビューは研究のテーマとなっている社会現象に関してその情報を得るためにインフォーマント（情報提供者）から直接話を聞くという方法です。世論調査や市場調査などのアンケート調査，ナラティブやライフストーリーの聞き取りなど，人間を対象とする研究において広く使われています。研究の対象となる人びとの暮らしをまるごと理解しようとするエスノグラフィにおいても，インタビューは主要な方法の１つです。日常の行為とその意味について，その日常を営んでいる人びとの視点から，理解することが必要だからです。ヘルス・エスノグラフィもその探求の方法は現場に密着して行う調査であり，インタビューは重要な方法です。

人類学者のスプラッドリーはエスノグラフィッ

ク・インタビューを構成する12の要素を特定し，さらにそれを特徴づける３つのもっとも大切な要素を次のように説明しています[1)]。

第一に，目的が明確です。これは，すべてのインタビューに通じる要素です。質問も応答も研究の目的にそって方向づけられています。質問をする人は普通の会話よりもより正確に話を進め，質問を受ける人がもっている文化的な知識を明らかにできるよう，話を方向づけます。

第二に，インタビューの説明をします。研究の概要，記録の理由，話し手のことば，質問の内容，質問の説明などについて実際の質問を行う際に説明します。

第三に，エスノグラフィにはそれに特有の質問があります。スプラッドリーはそれを記述，構造，比較対象の三種類にわけました。

インタビューで大切なことは，質問の意図を相手に正確に伝えることです。現代の保健，医療，福祉の現場では，健康や病気に対する人びとの意識を聞き取ることがこれまで以上に重要になり，口述資料の使用は保健・医療・福祉にかかわる領域で行われる研究のかなめとなっています。この領域を総括するヘルス・サイエンスにおける２つの大きな方法論的立場である，実証主義と解釈主義のどちらにおいても，ことばを通して現実に接近しようとする姿勢に変わりはありません。

研究テーマを明確にし，そのテーマに沿って質問を正しく伝えることも大切です。ヘルス・サイエンスの対象となる人間の健康や福祉や医療にかかわる現象はどれも多面的であり，さまざまな側面から探求することができます。身体と精神，信念と行動，生理と文化など，健康をどのように定義しどの側面から探求するかによって健康に対する質問のあり方も異なってきます。

社会学者のフォディによれば，質問と応答の循環モデルの最初の段階で行うべきことは，探求しようとするテーマを明確に定義することだと言います。すなわち，研究者は研究の対象となる現象のどの側面に焦点をあてるのかを決めなければなりません。そして，なぜその情報が必要なのかという，研究を行うことの理由を，その理論的，実践的意義をふまえて考慮することなしにその決断はできないと言います[2)]。

一般に，エスノグラフィはあらかじめ決められたテーマや理論的含意をもたずに現場に入り，現場の人びととのかかわりを深めながら，研究テーマを探すという手続きを踏みます。調査の初めのころは質問もあいまいなものになりやすいのですが，どのような段階においても，研究者の意図をインフォーマントが正確に読み取ることができなければ，得られた情報は双方にとって意味のあるものになりません。包括的な視点のなかに，いくつもの具体的な質問を用意して，明らかにしようとする現象の全体をていねいに描いていくことが大切です。

フィールドに数年滞在して行うエスノグラフィック・インタビューでは，長い期間を使ってデータの質を高めることができます。信頼関係を少しずつ深めていくことによって，よりていねいな質問ができるようになり，答える人も自分の思いや考えを率直に表現できるようになります。ところが，保健・医療・福祉の現場で行うエスノグラフィは時間的，倫理的な制約も多く，インタビューを１回で終わらせなければならないことがよくあります。そのようなときには，初対面で信頼を得るための態度や工夫が必要になります。

Ⅲ．ワークショップ

以上述べてきた，人類学の方法として発達したエスノグラフィのインタビューを対話的な保健医療の枠組みでとらえると，何が見えてくるのでしょうか。

以下では，この問いに答えることを目的に，今回のワークショップの内容と参加者からの意見やフィードバックを振り返ってみたいと思います。

ワークショップは，目的を共有する，主要概念を知る，エスノグラフィック・インタビューの準備をする，質問を作る，エスノグラフィック・インタビューを行う，まとめと振り返りの６つのテーマのもとに行いました。

①目的を共有する

ワークショップ参加の目的を参加者と共有しました。エスノグラフィック・インタビューを聞いたこ

とがある人，いない人，実際にエスノグラフィック・インタビューを行ったことがある人，いない人を尋ねました。そして今日学びたいことを尋ねました。その結果は，インタビューをはじめてするときの心得から，エスノグラフィをはじめて行うための準備などさまざまでした。

そこで，グループに分かれるセッションを各テーマに設けて，多様なバックグラウンドやエスノグラフィック・インタビューへの関心をもつ人たちがお互いの気持ちを開示して，対話しながらエスノグラフィック・インタビューに取り組めるようにしました。ワークショップからのお願いとして，お互いに協力して積極的に質問すること，新しいことに心を開いて，間違いを恐れないこと，自分の学びに自信をもち，意見の対立を恐れないことも伝えました。

②主要概念を知る

グループワーク１を行い，エスノグラフィック・インタビューに関する用語や主要な概念について整理し，エスノグラフィック・インタビューの特徴について話しました。参加者には、事前に，筆者が執筆した『ヘルス･エスノグラフィ』[3] のインタビューの章を読んできていただきました。

グループワークでは、エスノグラフィック・インタビューはフィールドワークの一環として行われるため，１日を通した出来事をインフォーマントに細かく聞くなど，エスノグラフィに独特の質問の様式があることなどが話されました。

③エスノグラフィック・インタビューの準備をする

エスノグラフィック･インタビューの準備として，（保健・医療・福祉に関する）インタビュー・テーマを考え，そのテーマについて，いろいろな角度から，研究設問とそれへの暫定的な答えを考えてみました。たとえば，次のような質問です。

子どものころ，あるいは，大人になってから，風邪をひいたときの経験を思い出してみましょう。

- 周りの人の反応や対応はどうでしたか？
- 自分ではどう対処しましたか？

風邪をこじらせて病院にきた患者さんがいました。

- どのような症状でしたか？
- どのように対応しましたか？

その時に，患者さんとした会話を覚えていますか？何を話しましたか？

これらの質問に相手は次のように答えたとします。

- 周りの人の言うことを聞かないで，寒い日に薄着で，出かけて，風邪を引いた。
- 仕事が忙しく，病院に行くのが億劫で，そのまま無理をして，風邪をこじらせた。
- 昔から病院は嫌いだった。まだ若いから，すぐ治ると思った。症状が悪化した。

いずれも，どのような人にもあることですが，それを,医療者の目でアセスメントするというよりも，そういうこともあるかもしれない，という態度で聞きます。それは,他者のあり方に向き合うことです。

そして，それは，自分の在り方や価値観を，少しだけ横に置くことです。「自分が身に着けている文化の衣を脱いでみる，しかし，相手の文化の衣にはまだ手が届かない」。エスノグラフィでは，研究者はいつも，そのような緊張状態に，身を置いてみるということになります。

④質問を作る

グループワーク２では，エスノグラフィック・インタビューの質問をつくりました。グループで,テーマを決めて，３つから５つの問いを立てました。そして，インタビューに入るための２つのステップを確認しました。それらは，場を和ませる，自分は学び手であると相手に伝える役割があります。

ステップ１

場を和ませるために，親しみやすい会話を行い，相手に正しく向き合います。そして，相手の心が前向きになってから，インタビューの目的と目標を明確に話します。自分がこのインタビューで何をしようとしているのか，自分の関心や理解したいことを明らかにすることが大切です。

ステップ２

研究者はいつも，学び手です。対象となる人の生

き方について知りたい，それを自分は知らない，だから，インタビューを通して，知りたい。そのため，自由に話してほしいと，相手に伝えます。自らを生きていることは，その人が一番よく知っています。そのような態度を示すと，話し手がインタビューの流れを決めていくようなインタビューになることもあります。

⑤エスノグラフィック・インタビューを行う

実際にエスノグラフィック・インタビューを行うにあたり，3つから5つのステップを用意しました。

ステップ3

最初のステップは，実際にインタビューすることです。エスノグラフィでは，オープンで全体的な質問が特徴です。そのほかの特徴は次の通りです。

- 全体的に大きく物事をとらえる。
- 事前によく計画して準備する
- 質問者と応答者には，「ほどよい感情」が生まれている（生きた経験を聞く準備ができている）。
- 応答者はそれぞれに固有の貴重な経験をもつ。

このような，オープンで全体的な質問の様式で話す理由は，個人のものの見方も行動の仕方も，その人の世界観と関連づいて、かかわりあっていると考えるからです。質問と応答が継続するにつれて，相互理解が深まってきます。最初に考えていた質問が不適切である場合には，適宜，質問を見直します。

本ワークショップでは，グループワーク3のなかで実際にエスノグラフィック・インタビューを行いました。最初に，グループで役割を決めて，インタビューする人，インタビューを受ける人，筆記する人に分かれました。そして，グループワーク2で立てた3～5つの問いを丁寧に聞き，インタビューの結果を，ワークショップ全体で共有しました。そこでは，とてもよくできたこと，疑問点や難しかったこと，このようにすればよかったと思うことの3点に結果をまとめました。

ステップ4

次は，カバータームとは　言語的ラベルであり，重要な語りを包括するように（カバーするように）インデックスをつけることです。それは，他者の生きている経験をエスノグラフィのレンズでみるための言葉であり，対象者によってしばしば語られることばです。それを特定するために，グループで記録を共有し，カバータームのインデックスをつけてみました。コード，カテゴリーという分類にはこだわらずに，3～5つのカバータームを見つける作業を行いました。

そして，その結果をワークショップ全体で共有し，次の問いを検討しました。

- カバータームは何でしたか。
- グループで意見は分かれましたか。

質的研究において，カバータームは，現象から引き出される，現象に特有のものですが，その文脈をよく知っている質問者なら，だれでも同じような結果を導くことが理想です。これを踏まえて，分析の結果を，グループとワークショップ全体で共有してみました。

ステップ5

カバータームが特定されたら，次に，その意味の記述を付けます。カバータームはなぜ，そのカバータームなのか，それぞれのカバータームはどのように説明できるかを考えます。その際に，対象となる人の視点から，そのカバータームの意味を記述することを練習しました。

そのために，次の点に留意しました。

- カバータームで括られたナラティブのセグメントには，語り手の生きている世界に即した情報が含まれている。
- 語り手の世界から離れないように，説明する。
- 今回は，コード，カテゴリーというように階層化せず，研究者の視点も用いない。あくまでも，相手の視点と相手の語りから考えてみる。
- カバーターム，説明，ナラティブのセグメントで1セットと考える。

グループワーク5では，エスノグラフィック・インタビューのステップ5として，グループで，カバータームの意味を考えました。全員で，すべてのカバータームに説明をつけました。そして，どのようなカ

バータームと説明を，インタビューのナラティブにつけたのかを全体で共有しました。

⑥まとめと全体の振り返り

最後に，ワークショップの振り返りを行いました。エスノグラフィック・インタビューのステップを踏んでみて，よかったこと，疑問点などを振り返りました。そして，以下のステップについても，自由に意見を交わしました。

- エスノグラフィック・インタビューのテーマ
- エスノグラフィック・インタビューの問い
- エスノグラフィック・インタビューの実際
- エスノグラフィック・インタビューの分析

さらに，臨床や地域医療・保健への応用について考えました。たとえば，ヘルス・エスノグラフィの視点は，みなさんのフィールドや日常生活にどのように応用できますか，そこにどのようなチャレンジや課題がありますか，その課題をどう乗り越えることができますか，そして今日の学びをどのようにしていきたいですかという問いです。

参加者のみなさんからは有意義なご意見をいただきました。以下，抜粋します。

体験できて良かったです。2時間では足りないと思うほど，興味深い体験となりました。

エスノグラフィック・インタビューとはどのようなものなのか，実際の実践例をモデルとして拝見してみたいと思いました。エスノグラフィック・インタビューを自身の研究にとりいれ実施したいと思いますが，今回のワークショップの時間だと理解，取得は難しいと感じました。

エスノグラフィック・インタビューに参加しました。参加者交流も活発にできて，基本的なことも感じ取れて，とても良かったです。もう少しグループワークの説明や設定を細かくしていただけると充実したものになったかなと思いました。

実際行ってみて難しさを体感でき，今後の自分の課題を見出すことができました。もう少し時間をとって背景にある研究思想や具体的な分析方法も学びたいと思いました。

エスノグラフィのインタビューを対話的な保健医療の枠組みでとらえると，このように，自分自身の気づきにつながるのではないかと考えます。他者理解と自己理解は相互に深く結びつき，他者との対話が，自分との対話につながっています。

利益相反

利益相反はない。

引用文献

1）Spradley, J：The Ethnographic Interview, Rinehart, New York, 1979
2）Foddy W H：Constructing questions for interviews and questionnaires: Theory and practice in social research, Cambridge University Press, 1993
3）道信良子：ヘルス・エスノグラフィ，医学書院，東京，2020